

いと考えられている。同様の理由により、みなし仮設に入居する方々に対する全戸訪問等の大規模調査は実施されにくく、盛岡市に居住する避難者の精神健康度は定量的なデータがない。そのため盛岡市では、東日本大震災、津波の避難者を対象にアンケートを行い、現在の住まい・仕事の状況や今後の居住意向などについて調査したり。

市内のみなし仮設住宅に入居する 442 世帯に実施し、213 世帯（48.2%）から得られた回答によると、近所との交流が、「たまにある」と答えた世帯が 41.5%あり前年度の同調査（37.3%）より増加している。また、近所との交流があると回答している人に盛岡市への「住みやすさ」を感じている人の割合が高い傾向があったり。

今後の住まいについては、「震災前に住んでいた市町村で住宅を再建したい」12.3%（前年度 9.4%）、「震災前に住んでいた市町村で災害公営住宅・民間住宅に入居したい」12.7%（同 8.3%）で約 25%が地元での再建を望んでいる。「盛岡市内で住宅を再建したい」17.5%（同 16.9%）、「盛岡市内で公営住宅・民間住宅等の賃貸住宅に入居したい」20.3%（同 18.8%）と盛岡への定住を望む人も 37.8%と増加。「未定」とする人 32.1%（同 39.8%）いて、減少傾向にあるものの一定割合の人が住居に関する方向性を決められずにいる。また、住宅再建を希望する世帯の 33.3%が「場所、費用両方めどが立たない」と回答し、「場所と費用のいずれかの目途が立たない」を合わせると 57.1%に達している²⁾。

2) 盛岡市で行われる支援の概要

盛岡市には、大きく 2ヶ所の支援拠点がある。一つは、盛岡市役所内丸分庁舎に設立されている、「もりおか復興支援センター」であり、もう一ヶ所が盛岡市本宮に開設された、「しえあハート村」である。

「もりおか復興支援センター」は 2011 年に設立され、一般社団法人 SAVE IWATE（以下、SAVE IWATE という）へ実施業務が委託された。2011 年には、震災直後に設置された避難所へ職員を 2

名配置し運営にあたり、その後は「民間賃貸住宅借上げによる応急仮設住宅（みなし仮設住宅）」の活用により、民間賃貸住宅を借り上げて提供することで被災地域出身者の対応を行っている。また、被災者への情報提供や生活相談などを行っている。みなし仮設住宅には、平成 27 年 1 月時点で 294 戸数 592 名（表 1）が盛岡市内に居住している³⁾。

もう 1ヶ所の支援拠点が、盛岡市が都市再生機構（UR）から無償提供された住宅 25 棟を活用した「もりおか復興推進しえあハート村」である。2012 年度から住宅を利用して運用してきた「もりおか復興支援学生寮」のほか、ボランティア宿泊施設「ボランティア番屋」、地域コミュニティーセミナーハウス、復興支援シェアオフィス、復興支援コミュニティーカフェ「しえあハート村マルシェ」、復興推進デジタルコンテンツシェアオフィス、の 6 事業が設置されている。

なお、復興支援シェアオフィスには、公募で選ばれた復興支援団体の「遠野まごころネット」、「ゆいっこ盛岡」、「ブラインドドリーム」、「サンガ岩手」、「助けあいジャパン」の 5 団体が入居しており、活動拠点を集約することで連携を図っている。

現在、もりおか復興支援センターによる「お茶っこ飲み会」や定期的な避難者の訪問を実施している。2013 年度からは、畑仕事を通じて外に出る機会が少ない男性が市民と交流できる被災者の健康と生きがいがづくり事業などにも取り組んでいる。

3) 盛岡における地域精神保健福祉システムと被災者支援・復興支援の協働に向けて

盛岡市では、従来から在った地域精神保健福祉システムは組織や拠点がなくなる等のハード面の変化は起きなかった。また、盛岡市にはこころのケアセンターに代表されるような岩手県内全域に対する精神保健福祉システムが多く存在している。

盛岡市は、震災後の支援において沿岸被災地の

後方支援をする地域として機能していると言える。被災者に対する支援でも、盛岡に拠点をもつ法人、SAVE IWATE は盛岡に住む避難者への支援を行うとともに、県内の各支援団体とのネットワークを持つ役割を有すると思われる。

B. 支援者支援の内容

上記の内容を踏まえ、平成 26 年度は以下のような支援を行った。

1) 支援プログラムの開発と運営支援

物資支援に対するニーズの低下と、相談支援やサロン活動に対するニーズの高まりがあり、2012 年 7 月から「番屋こびるの会」を 1 ヶ月に 1 回の頻度で開催していたが、平成 26 年度は定期開催せず、もりおか復興支援センターでのサロン活動に集約した。この会は、盛岡在住の沿岸出身者（多くがみなし仮設入居者）が集まることのできるサロン活動の場として設置した。

物資提供と相談支援やプログラムの運営では職員に求められる知識や能力に違いがあり育成する必要があるため、盛岡市地域の専門職者が運営をサポートし、会の開催毎にプログラム検討会を行った。

また、SAVE IWATE の学習支援チームでは、被災地（山田町）に住む子どもや盛岡市に避難している子どもに向けた学習支援活動を行っている。夏と冬にキャンプを行っており、参加する子ども達がキャンプに参加することによる精神的動揺が発生する可能性も踏まえ、研究協力者が対応に関する助言をおこなった。

2) 研修等による支援

震災復興支援団体として存在している SAVE IWATE には精神保健福祉や相談支援の専門職者である者が少ない。一方で、もりおか復興支援センターで行う事業の多くが被災者の生活支援であるが、その中、必要な要素に精神保健福祉医療で重要な、ストレングスへの着目、リカバリー視点などの要素が活用可能である。そのため、平成

26 年 10 月 30 日～11 月 1 日に開催された日本精神障害者リハビリテーション学会の年次大会に一般演題の発表と関連展示を行った。上記大会はテーマを「リカバリーの風—人へ社会へ未来へ」としていた。演題発表や展示の実施をきっかけに精神保健福祉の専門職者と復興支援関係団体の交流や情報交換が行われた。

また、学習支援を行うグループや訪問による生活相談をしているグループがあるものの、精神障害および精神保健福祉に関する研修が実務につながるという感覚を持ちにくい職員もいるため、発達障害者に対する支援についての研修経験を有する方を講師に招いた援助の工夫に関する研修を行った。また、体験を伴う研修の有効性を探るため、サイコドラマ（心理劇）を活用するワークショップを実施した。また、幹部職員等に対するストレングスモデルによるアセスメントの工夫を紹介した。

C. 今後の課題と考察

震災から 4 年が経過し、内陸へ避難して暮らす方々の状況にも変化が生じてきている。みなし仮設に住む方は徐々に減少してきているものの一定数存在しており、その方々の生活状況に合わせた相談が今後も必要となるだろう。

盛岡在住の被災者および沿岸出身者は、徐々に盛岡市内のコミュニティに統合されつつあることが予想されるが、盛岡市内の地域の集まりなどに参加しにくいままである方もいるため、いわゆる援助につながりにくい状況になっていることが予想できる。地域住民のニーズが見えにくいかで関係を維持していくことが必要であり、ストレングス、リカバリー、地域重視といった地域精神保健福祉の知見を活かすことが可能であるだろう。特に、ストレングスモデルとリカバリーゴールに向けた支援は精神障害や障害分野に限らず、災害弱者に対する支援で重要な基盤であるため、SAVE IWATE の職員が行っている被災者支援においても今後も重要な視点となると思われる。

る。

また、SAVE IWATE の職員自身も被災や様々な困難をもっている場合があり、職員自身の経過や経験を否定せず尊重しながら今後へつなげていくことが大切である。

D. 結論

震災後発足した団体である SAVE IWATE は、震災後 4 年が経過するなかで、盛岡市や内閣府などの助成を受けて内陸部に避難している被災者や、被災地で就職や起業を行おうとする被災者への支援へと変化してきた。このニーズ変化は、精神医療や精神保健福祉の分野で見られる、回復過程のモデルを適用するとニーズの変化が捉えやすいと考え、プログラム開発や職員研修等を行った。

E. 健康危険情報 特になし

F. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

G. 知的所有権の所得状況 特になし

文献

- 1) 交流の少なさ、再建へ不安も 盛岡市 内陸避難者アンケート結果.『盛岡タイムス』2013 年 10 月 23 日朝刊.
- 2) 応急仮設住宅、みなし仮設住宅の被災者の状況. (岩手県震災復興関連ホームページより)
www.pref.iwate.jp/saiken/sumai/023870.html
- 3) 暮らしの再建に向けた当面の課題と取組み. 岩手県復興局 (東日本大震災支援全国ネットワークによる資料から).
http://www.jpn-civil.net/activity/hisaichi/genchi_kaigi/docfiles/120713_iwate_handout_00_2.pdf

表1 応急仮設住宅、みなし仮設住宅に住む被災者の状況（平成27年1月末時点）

1月31日 時点	応急仮設住宅		みなし仮設住宅						応急仮設等合計		
			民間賃貸住宅		公営住宅等		みなし仮設計				
	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	
① 陸前高田市	1,677	4,127	52	153	55	148	107	301	1,784	4,428	
② 大船渡市	1,330	2,839	272	665	75	198	347	863	1,677	3,802	
③ 釜石市	2,226	4,632	233	575	234	951	467	1,526	2,693	6,158	
④ 大槌町	1,694	3,516	57	166			57	166	1,751	3,682	
⑤ 山田町	1,657	3,596	131	372	4	11	135	383	1,792	3,979	
⑥ 宮古市	1,351	2,723	322	801	44	122	366	923	1,717	3,646	
⑦ 岩泉町	78	171	12	29	1	2	13	31	91	202	
⑧ 田野畑村	67	141	4	13	1	2	5	15	72	156	
⑨ 野田村	112	295	23	77			23	77	135	372	
⑩ 久慈市	4	8	41	112	3	5	44	117	48	125	
⑪ 様野町	1	1	1	5			1	5	2	6	
⑫ 普代村			1	2			1	2	1	2	
1 住田町	49	114	6	18			6	18	55	132	
2 遠野市	23	37	17	41	19	49	36	89	59	126	
3 盛岡市			259	527	35	65	294	592	294	592	
4 花巻市			52	109	32	71	84	180	84	180	
5 北上市			60	115	35	72	95	187	95	187	
6 二戸市			1	1			1	1	1	1	
7 一関市			107	257	59	123	166	380	166	380	
8 八幡平市			1	2			1	2	1	2	
9 奥州市			42	95	23	42	65	137	65	137	
10 雫石町			5	16	1	4	6	20	6	20	
11 葛巻町									0	0	
12 岩手町			24	58	6	15	30	73	30	73	
13 滝沢市			14	38	4	14	18	52	18	52	
14 紫波町			19	46	6	15	25	61	25	61	
15 矢巾町			1	3			1	3	1	3	
16 西和賀町			4	5	1	2	5	7	5	7	
17 金ヶ崎町									0	0	
18 平泉町									0	0	
19 軽米町									0	0	
20 九戸村									0	0	
21 一戸町									0	0	
小計	沿岸計	10,197	22,049	1,149	2,970	417	1,439	1,566	4,409	11,763	26,558
	内陸計	72	151	612	1,331	221	472	833	1,802	905	1,953
県内計		10,269	22,200	1,761	4,301	638	1,911	2,399	6,211	12,668	28,511

岩手県復興局生活再建課のホームページより

被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に向けた 外部支援の成果と課題 ～三年間の支援活動に関するヒアリング調査から～

研究分担者 池淵恵美¹⁾

研究協力者（主執筆者に○）○種田綾乃²⁾ 伊藤順一郎²⁾ 鈴木友理子³⁾ 深澤舞子³⁾

永松千恵²⁾ 村木美香²⁾

1) 帝京大学医学部 精神神経科学講座

2) 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 社会復帰研究部

3) 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 成人精神保健研究部

要旨

【目的】当研究班における三年間にわたる外部支援者の支援者支援活動の成果と課題を現地支援者の語りの中から明らかにすること、および、震災後の支援活動における苦労や、苦労や成長の過程において外部支援者が果たした役割と課題、そして今後に向けた希望を整理し、外部支援の在り方を検討することを目的とする。

【方法】2014年10月～2014年12月、研究班の7サイトにおける現地支援者のフォーカスグループ・インタビューを実施し、計55名の現地支援者より協力を得た。調査項目は、①震災後～現在における支援活動を行う上での苦労、およびその中で外部支援者の果たした役割、②自分自身や支援チーム・地域としての成長を感じたこと、およびその中で外部支援者の果たした役割、③今後、自分自身や支援チーム・地域として望む姿という三点について、すべての協力者より発言を得た。

【結果】分析結果から、現地支援者における支援活動における「苦労」としては、「個人的な苦労」「チームとしての苦労」「ネットワーク・地域としての苦労」「外部支援者との関係性における苦労」の側面により整理され、各サイトの特性・状況により多様な苦労が挙げられた。また、当研究班により実施された、外部支援者による支援者支援は「現地支援へのスーパーバイズ・コンサルテーション」「支援同行・直接支援」「勉強会・研修会・事例検討会」「ネットワークづくり・維持」「サロン活動・イベント・交流の場づくり」「先進地の視察・研修」「学会・研修会・交流会への派遣」「グループインタビュー」に整理され、これらの支援者支援は、「負担の軽減」「学び・発見」「充足感」「つながり・拡がり」「地域への貢献」につながっていたことが確認された。さらに、現地支援者の今後の希望や決意・課題としては、「自分自身の成長」「活動の存続・発展」「地域のネットワークづくり・ネットワーク強化」「外部支援との関係性」「震災の記憶・情報発信」が挙げられた。

【考察】被災地の中長期的な支援活動における現地支援者の苦悩としては、活動の意義や役割、方向性を「模索」する状況があり、混沌とした状況であるがゆえの精神的な負担の大きさが確認された。こうした中長期的な苦労の中で、当研究班による重層的な構造による支援者支援は、現地支援者にとって「安心感」と「特別感」のある存在として、支援者自身や組織・地域としての課題を改善し、成長していくうえでの大きな促進力となってきたことが推察された。当研究班による活動で生まれた地域における新たな文化をどのように引き継いでいくかが、今後の大きな課題である。

A. 研究の背景・目的

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災の発生から4年余りが経過した。未曾有の大震災は、巨大地震、大津波、火災、原子力発電所の事故とそれともなう放射能問題等、複合的な要因による広域かつ甚大な被害をもたらし、地域精神保健医療福祉の現場においても、震災による様々な混乱や影響が生じた。震災にともなう被害の復旧復興の過程において、被災地の各地域においては、既存の支援機関等とともに、震災後に新たに加わった支援チーム／ネットワーク等の現地における支援者が中心となりながら、地域外の外部支援者によるサポートのもと、支援活動が実施されてきた。

当研究班は、震災から一年後の2012年より活動を開始し、2012年度～2014年度の三年間にわたり、東北地方の3県7サイト（宮城県：3サイト、福島県：2サイト、岩手県：2サイト）の地域精神保健医療福祉などに従事する支援チーム／ネットワークを対象として、コンサルティング担当者（外部支援者）による支援者支援活動を継続的に実施してきた。

コンサルティング担当者による支援の対象となったサイトは、支援チーム：5サイト／ネットワーク：2サイトである。震災以前からの既存の活動は2サイト、震災を機に結成設立したものは5サイトであり、精神保健医療福祉に焦点化した活動は4サイト、精神保健医療福祉に特化しない活動は3サイトである（図1）。

当研究班による活動では、被災地域の現地支援者のニーズに基づいた支援活動を展開することを大きな特徴としている。そのため、各サイトにおける課題や支援ニーズを把握し、支援者支援活動をより効果的に実施していくために、各サイトにおいて、複数回のヒアリング調査（フォーカスグループ・インタビュー）を支援活動と並行する形で定期的実施した（図2）。

第1次ヒアリング調査は、2012年8月～2012年10月に実施し、研究班の6サイトにおいて、精神保健医療福祉の活動に従事している現地

支援者（各サイト5～14名）と対象地域におけるコンサルティング担当者、および、調査員（2～3名）によるフォーカスグループを設定し、インタビュー調査を実施した。ここでは、震災直後から調査時点までの状況を中心として、支援チーム／ネットワークとしての課題や外部支援者に望むことを明らかにした。

第1次ヒアリング調査の分析結果¹⁾では、中長期支援における課題として、「ネットワークづくり・地域づくり」、「スーパーバイズ・コンサルティング」、「支援者のメンタルヘルス」、「チームビルディング」、「社会資源・人材不足」、「困難事例・ハイリスク家庭」、「活動のとりまとめ」の7つのキーワードが抽出され、これらのキーワードに着目する形で、第2次・第3次ヒアリング調査が実施された。

第2次ヒアリング調査は、2013年2月～2013年10月、計7サイトに対して実施し、第3次調査は、2014年2月～2014年5月、計6サイトの現地支援者に対して実施した。調査方法は、第1次調査と同様、フォーカスグループ・インタビューにより実施し、前回のヒアリング時～調査時点までの期間における、コンサルティング担当者による支援者支援に焦点を当てながら、チーム／ネットワークの状況と課題を確認した。第2次・第3次調査を含む、各サイトでのヒアリング調査における状況は、中長期支援の7つのキーワードに着目して、サイトごとに整理を行った（詳細は参考資料1～7の各地区におけるヒアリング実施状況の資料を参照）。

本稿では、2014年度に当研究班に関わるすべてのサイト（7サイト）において実施した第4次ヒアリング調査における状況をもとに、三年間にわたる外部支援者（当研究班のコンサルティング担当者）の支援者支援活動の成果と課題を明らかにすることを目的としている。現地支援者の語りから、三年間の支援活動における苦労や、苦労や成長の過程において外部支援者が果たした役割と課題、そして今後に向けた希望を整理し、外部支援の在り方を検討する。

B. 研究方法

1) 研究対象 (表 3)

当研究班の7サイトにおいて地域精神保健医療福祉に従事し、当研究班の外部支援者とのかわりのある者(各サイト2~14名、計55名)を本研究の調査対象とした。

2) 調査方法

2014年10月~2014年12月、各サイトに調査担当員2名が訪問し、本研究班の現地支援者によるフォーカスグループでのインタビュー調査を実施した(コンサルティング担当者は同席しない形で実施)。

調査員は、あらかじめ設定したインタビュー・ガイドにもとづき、すべての参加者がそれぞれの調査項目に関して発言ができるよう促しながら実施した。

調査における発言は、参加者の同意のもと、ICレコーダーに録音した。各サイトでのインタビュー時間は、1サイトあたり112分~154分間である。

3) 調査項目 (インタビュー・ガイド)

本研究では、対象者らが自由に回答のできる開放的な質問を、あらかじめインタビュー・ガイドの形にまとめ、それを口頭および配布資料にて提示したうえで、インタビューを行った。

インタビューの項目は、以下3点である。

1. 震災後から現在において、支援活動を行う上で苦勞したことはなんですか。
その中で、外部支援者の果たした役割はどのようなことですか。
2. あなた自身や支援チーム・地域としての成長を感じたこと・よかったことはなんですか。
その中で、外部支援者の果たした役割はどのようなことですか。
3. 今後、あなた自身や支援チーム・地域として、どのような姿を望みますか。

4) 分析方法

収集データは、逐語記録を作成のうえ、以下の①~③の手順に従い、分析を行った。

- ① 収集したデータを会話に沿って読み込み、指示語の内容や発話者の気持ち、疑問点を明確にした。
- ② それぞれの調査項目に該当する発言部分を切り分けた上で、データを意味のまとまりごとに区切り、個々の切片ごとに内容を端的に表す「ラベル名」を付けた。
- ③ 類似したラベル名同士を統合し、より抽象度の高い「カテゴリ名」を付けた。

5) 倫理的配慮

インタビューは、対象者に対する、口頭と文書により研究内容の説明を行い、全ての参加者からの承諾を得た上で行った。

録音は、調査協力者の承諾を得た上で、インタビュー中の発言内容については、公表してほしくない部分がないかを確認の上、分析を行った。

C. 結果

1) 支援活動における苦勞 (表 4)

支援活動における「苦勞」は、質問項目①に関する発言を中心に分析を行い、52のサブカテゴリが抽出され、16のカテゴリとして整理された。

さらに、16のカテゴリは、「苦勞」の内容の所在により、I:個人的な苦勞、II:チームとしての苦勞、III:ネットワーク・地域としての苦勞、IV:外部支援者との関係性における苦勞の4つの側面により整理された。

なお、以下、カテゴリは《 》、サブカテゴリは〈 〉で示し、データの引用部分は、斜体文字または、文中に「 」で示す。引用データにおいて、とくにカテゴリの作成において着目した部分は、引用データ中に下線にて表す。

●個人的な苦勞

現地支援者自身の個人的な経験として語られ「苦勞」の要素としては、《日常生活・家庭生活での苦勞》、《支援場面での苦勞》の2カテゴリが抽出された。

《日常生活・家庭生活での苦勞》としては、特に、震災直後～活動開始初期の状況として、「暇してました。何もすることもないので、毎日、時間をもて遊んでいました（宮城 B、女性）」という言葉に代表されるような〈目的・生きがいがないこと〉や、「（震災により長年別居していた息子と同居することとなり）一緒に家の中にいて何をしゃべったらいいのか、せがれは一体何を考えているのか、それがわからなかった（宮城 B、女性）」という声にもあるような〈日常のコミュニケーションでの迷い・不安〉が苦勞の一つとして語られた。

また、中長期的な期間における状況においては、〈自身の被災体験にともなう苦勞〉や〈家庭内の変化にともなう苦勞〉が挙げられた。

以下は、〈自身の被災体験にともなう苦勞〉に関する語りである。

・頭の中は震災のことです。いっばい。（中略）やはり、時が経てば、本当にその場面を思い出せば涙が出てくるのだけれども。その当時は、本当に何も考えないで。体育館の中でも空気が淀んでいたのでしょうけれども…あそこの窓から霊柩車が来たなど、そんなのを見ていたから。本当に最初は、こういうこと（研修）して何をやるのだと思ったり、生きている人たちのことを何かしてやったほうがいいのだと思ったり。（宮城 B、女性）

さらに、《支援場面での苦勞》としては、支援活動開始初期の状況において〈震災直後の支援活動での精神的負担〉、〈慣れない土地での支援活動〉、〈未経験な現場での不安・苦勞〉、〈被災者への関わり方への不安・配慮〉が語られた。

以下は、〈被災者へのかかわり方の不安・配慮〉に関する語りである。

・知らない人の家に突っ込んで行って、「どうも」と言うのが、非常に難しかったのと、やはりその…被災地であるという。我々は仙台から来ているので、被災者の方に対して、すごい気を遣わなければいけないと、ずっと思っていたのです。極力地元の人たちには迷惑をかけないように、支援者の人たちを連れて来たり。（中略）そういう気遣いは、初期の頃は非常に大変だったなという思いがあります。（宮城 C、男性）

また、中長期的な課題としては、〈支援に関する知識・技術不足〉、〈習得知識の活用の難しさ〉、〈未経験な現場での不安・苦勞〉、〈困難ケースへの対応〉、〈チームでの自身の位置づけにおける苦惱〉が語られた。

●チームとしての苦勞

支援チームにおける苦勞は、震災を機に新たに作られたチームを中心として発言があり、《業務負担》、《スタッフの多様性》、《スタッフ間の関係性》、《活動の継続》、《活動の位置づけ》の4カテゴリが生成された。

《業務負担》による苦勞としては、〈業務量の増加〉や〈事務的業務の負担〉の状況と、それにとともなう〈スタッフの疲労・疲弊〉が含まれていた。

以下は、〈スタッフの疲労・疲弊〉として語られた言葉である。

・みんなそれぞれに抱えながら進んでいく部分の疲れというは、あるのです。どちらかというと、疲れ的に激しい疲れではなく、もっと重たい疲れになっているので、なかなかうまく解消できづらいところはあるとは思っています。映画を観に行っていて気分転換したから、良くなったという感じでは

ないですよ。なかなか。もう仕事の疲れは仕事で…みたいな感じでやっていくしかない感じはあります。(宮城 C、男性)

また、《スタッフの多様性》のカテゴリには、〈職種による価値観の違い〉、〈世代・性別の違い〉、〈スタッフの経験・技術不足〉といった多様なスタッフで構成されたチームであるがゆえの苦悩とともに、〈スタッフ間の被災体験・意識の違い〉といった震災に関連するチーム作りの苦勞も語られていた。

《スタッフ間の関係性》の苦勞としては、〈スタッフ間の衝突・不理解〉や〈コミュニケーション不足〉が含まれていた。

さらに、《活動の継続》に関する苦勞としては、〈活動場所の縮小〉による活動維持の難しさや、〈財政・経営面での苦勞〉が含まれていた。

また、《活動の位置づけ》における苦勞としては、〈地域への入り方への苦悩〉や〈活動の目標・方向性の模索〉、〈チームとしての地域内での立ち位置の模索〉といった震災直後から中長期的な支援におけるさまざまな模索の状況が語られていた。「やることどうしようね、ということが、非常にさまよっていた(宮城 C、男性)」
「最初はやはりこういう初めての組織づくり。急遽、まとめられたチームが何を目標にすればいいかというのは、最初わからなくて(福島 B、男性)」という言葉にあるように、特に震災後に新規に立ち上げられたチームを中心として、活動としての目的や方向性を模索する声が挙げられていた。

また、活動の位置づけやチームづくりを行う上で、〈チームリーダー・管理者としての苦悩〉についても語られていた。「組織としては、いまだに非常時の状態がまだ続いている。当初のめっちゃくちゃな状態からは、かなり落ち着いていますけれども、“非常時”には変わらないと思っています(岩手 A、男性)」という管理者の方の声にもあるように、震災から3年半の経過

する時点においても、「非常時」としての大きな苦悩を抱えているとの声もあった。

●ネットワーク・地域としての苦勞

支援チームにおける苦勞としては、《ネットワークの分断》、《社会資源の不足》、《復興格差》、《支援者のメンタルヘルス》、《地域活動の展開における苦勞》の5カテゴリが生成された。

《ネットワークの分断》に関しては、震災にともなう〈コミュニティの分断〉や〈仮設住居での孤立〉についての語りがあった。

《社会資源の不足》の内容としては、〈震災以前からの社会資源の不足〉に加え、〈震災による社会資源の減少・人材不足〉が課題として生じてきた(いる)状況があり、そのための〈ソーシャルアクションの必要性〉があることが語られた。また、〈ピアの力の育成〉を必要とする地域も見られた。

《復興格差》の内容としては、〈地域内の復興格差〉や〈地域内の機関での外部支援の格差〉とともに、ネットワークを構成するサイトにおいては、〈沿岸部ー内陸部の復興格差〉や〈事業所間での復興状況の違い〉が語られた。

《支援者のメンタルヘルス》としては、〈地域の支援者の精神的な負担〉が挙げられている。

《地域活動の展開における苦勞》としては、支援チームを中心としたサイトにおいては、〈住民の中に入り込む難しさ〉、〈地域ニーズ把握の難しさ〉、〈他機関との連携の苦勞・重要性〉が、ネットワークを中心としたサイトからは、地域における施設コンフリクトをはじめとする問題に関する〈精神障害へのスティグマ〉が挙げられた。

●外部支援者との関係性での苦勞

現地支援者における、外部からの支援者との関係性上の苦勞としては、《震災直後の混乱》、《研修における課題》、《情報発信》、《外部支援

の変化・終了》の4カテゴリが生成された。

《震災直後の混乱》としては、特に震災直後の時期において、〈震災直後の外部支援の飽和状態〉という状況や、複数の外部支援者が支援に入ることで、支援チームとしての〈方向性統一の難しさ〉、〈外部支援者の対応での気疲れ〉といった混乱の状況が語られた。

以下は、震災直後の混乱における〈方向性統一の難しさ〉、〈外部支援者の対応での気疲れ〉の状況に関する語りである。

・最初の頃は、いろいろな人が出てくるので、登場人物がたくさんいるので、誰がキーマンなのか、どの方法がいいのかみたいなのところを見つけるのにすごい苦勞して・・・(宮城 C、男性)

・結構人身知りなのですがそれでも、外から来る支援者と話をするのも大変で、常に知らない人とはばかりやり取りしなくてはいけないから、ものすごく気疲れしてしまっ、結局自分の中で抱えて処理しなくてはいけない。そういうふうにも思えてつらかったです。(宮城 C、男性)

・困った先生(外部支援者)をメールや電話の雰囲気察知して「この人は、少し困った先生っぽいから、気をつけなさい」というトリアージといえますか…そういう苦勞はありました。(宮城 C、男性)

《研修における課題》としては、〈研修後のモチベーション低下〉や〈研修疲れ〉といった課題が見られている。

また、《情報発信》に関しては、〈情報発信の必要性〉が語られる反面、支援活動の情報をどこまで公開すべきかといった〈情報公開の難しさ〉に苦悩するサイトも見られた。

《外部支援の変化》としては、特に外部支援者が直接支援にも携わっていたサイトにおいては、〈外部支援からの引き継ぎの難しさ〉や

〈外部支援が減少・終了していくことへの不安〉が語られた。

次の発言では、〈外部支援が減少・終了していくことへの不安〉や〈外部支援からの引き継ぎの難しさ〉が語られている。

・震災直後は、被災地ということで、いろいろなことが免除された経験をしました。(中略)

三年が経ち、当然いつまでも「被災地」ではなく、いろいろなことが普通に求められるようになってきています。今、結構、私たちの肩にずっしりとのしかかってきています。(岩手 A、男性)

・外部支援がなくなったときに、同じような質、同じような参加動機を持って、みんなに声をかけるようなこととして、(ネットワークを)継続していくというのは、個人的にすごくしんどいなというのがあります。(福島 A、男性)

2) 外部支援による現地支援者の変化

当研究班で実施された外部支援者による支援の内容は、第1～4次調査のデータ(参考資料1～7)を基に、表5のように整理された。

これらの外部支援による現地支援者の変化(成長)に関しては、質問項目②に関する発言を中心に分析を行い、《負担の軽減》、《学び・発見》、《充足感》、《つながり・拡がり》、《地域への貢献》の5カテゴリと整理された。

さらに、変化の契機となった外部支援の内容に着目し、I: 現地支援へのスーパーバイズ・コンサルテーション、II: 支援同行・直接支援、III: 勉強会・研修会・事例検討会、IV: ネットワークづくり・維持、VI: サロン活動・イベント・交流の場づくり、VII: 先進地の視察・研修、VIII: 学会・研修会・交流会への派遣、IX: (当研究班の)グループインタビューの9つの当研究班による外部支援による変化の要素を整理した(表6)。

●現地支援者へのスーパーバイズ・コンサルテーション

当研究班では、全てのサイトにおいて、外部支援者による継続的・定期的なスーパーバイズと・コンサルテーションが実施された。

現地支援者へのスーパーバイズやコンサルテーションにより生じた変化としては、《負担の軽減》と《学び・発見》の2カテゴリが含まれていた。

《負担の軽減》としては、〈苦労・ストレスの軽減〉、〈組織内の課題に対する支え、はけ口〉、〈気楽に相談できる関係性〉、〈気楽に相談できる関係性〉、〈第三者であることの安心感〉が含まれる。

以下の発言では、外部支援者によるコンサルテーションが、〈組織内の課題に対する支え、はけ口〉、〈第三者であることの安心感〉といった精神的な負担の軽減に役立っていたことが語られている。

・内部的な問題が非常にたくさん噴出してきたときに、正直本当に藁をもすがるぐらいの気持ちでした。なんで、こんなに内部でもめごとが起こるのか。外部の人に頼るしかない。外部の人は少し入ってもらうことで、自分たちではもうできないところを第三者に関わってもらう、私たちに対してアドバイスをしてもらいます。本当に大変なときには助けられました。結局、問題解決するのは、(外部支援者ではなく)私達なり本人、スタッフが最後はやらなくてはならないのですけれども、やはりそこで、少し外に頼れるというところが、すごく気持ち的には楽になったことがあったなと思います。(岩手B、男性)

《学び・発見》の要素としては、〈支援における知識・スキルの習得〉、〈対応力・柔軟性の獲得〉、〈ケースに対する見方の変化、アセスメントの変化〉、〈自身の力や可能性の気づき〉、〈他の専門性にかんする学び〉、〈新たな情報・

先進的な活動の情報の獲得〉、〈チームとしての可能性の確認〉、〈チームの方向性の助け・強化〉〈自身のチームでの位置づけの確認〉が挙げられた。

次の発言では、外部支援者による継続的なスーパーバイズが、〈対応力・柔軟性の獲得〉に役立っていたことが語られている。

・当事者や対外的な部分、他機関とのやり取りでもそうなのですけれども。やはりすごく拒否されたり、対決したり、巻き込まれたり、振り回されたりなど、いろいろあったので、ものすごく疲弊して、疲れて、「やってられねえや」と思ったりすることもあったのですけれども。やはり、やっていく上で、いろいろスーパーバイズを受けたりする中で、やはり、柔軟性みたいなものがすごく身についたかなと、自分としては思っているのです。(宮城C、男性)

次の二名の発言では、外部支援者による継続的なスーパーバイズが、チームとしての状況に対して新たな意味づけを見い出したり、改善点を明確化することにつながり、〈チームの方向性の助け・強化〉に役立っていたことが語られている。

・結構手厳しいご意見がありました。(現在の状況が)当事者主体とは程遠い内容のご意見が。(中略)私的には、やはりこれはいつも十分ではないなど。自分の能力やそういったものは足りないな、となんとなく思っていたのですけれども、改めてそうやって突きつけられて、やはり、真剣にいろいろ学んで、改善するべきところは、日々改善する必要があるのではないかと感じて。(福島B、男性)

・(スーパーバイザーのチームにおいても)悩みながらチームづくりをしている。それは、どこのチームでも同じだということであって、私たちがチームづくりを悩みながらやっているということも同じ

ことだし、進化というか、成熟の過程の一つなのかなと思って。(福島 B、男性)

●同行支援・直接支援

支援活動への同行や、要支援者への直接支援による変化としては、《負担の軽減》、《学び・発見》、《地域への貢献》の3カテゴリが含まれていた。

《負担の軽減》の要素としては、〈安心感・外部支援者への信頼〉や〈負担の共有・軽減〉が含まれている。

《学び・発見》の要素としては、〈活動への新たな意味づけ〉、〈支援における知識・スキルの習得〉、〈ケースに対する見方の変化、新たな可能性の発見〉、〈支援の一モデル〉、〈連携の重要性の確認〉が挙げられた。

支援同行時の外部支援者の支援の方法を〈支援の一モデル〉として、「(利用者との関わり方・話し方について)滑らかにというか、円滑な感じがあって、そのやり方を少し真似したり(宮城 C サイト、男性)」という形で、〈支援におけるスキル〉を習得している者もいた。

次の発言では、外部支援者による同行支援を通して〈支援における知識・スキル〉を実践場面に活用できる形として習得しているようすが示されている。

・一緒に訪問なども同行していただいて、アドバイスをもらったり、「同じふうに私も思ったよ」なんていうふうに言っていたこともあったので、自分たちの経験と実感というのですか。これでよかったのだという効力感みたいなのを、持ってこれたのではないかなと思っています。(福島 B、女性)

《地域への貢献》の要素としては、〈地域からの信頼の獲得・良好な関係性構築〉、〈地域ニーズの確認・掘り起し〉、〈支援の手薄な部分へ

の働きかけ〉、〈支援対象者の状況改善・リカバリー〉が挙げられた。

次の発言では、外部支援者による同行支援を通して〈地域からの信頼の獲得・良好な関係性〉を目の当たりにし、〈安心感・外部支援者への信頼〉とともに、〈支援におけるスキル〉(支援の一モデル)としていこうとする思いが語られている。

・(継続的な支援同行に携わった外部支援者は)これまで積み重ねてきた関係性があるので、職員さんたちにとって、すごく大きいのだと思うのです。やはりいらっしゃると職員さんの反応も全然違うのです。(中略)支援開始当初からいらして、というところが大きいと思うし、聞き出す力のやはり上手さというか、強さというところも。継続して行かれていますので、変化もよく見ておられる。我々は、なかなかそこが見えない部分でもあるので、それを目指して頑張っているところです。(宮城 A、女性)

●勉強会・研修会・事例検討会

勉強会や研修会、事例検討会による変化としては、《負担の軽減》、《学び・発見》、《充足感》3つのカテゴリが含まれる。

《負担の軽減》の要素としては、〈安心感・外部支援者への信頼〉、〈苦労・負担の共有〉、〈セルフケア、ストレス軽減〉が挙げられた。

《学び・発見》の要素としては、〈支援における知識・スキルの習得〉、〈支援場面での実践・活用〉、〈日常生活場面での実践・活用〉、〈支援における新たな視点の獲得〉、〈自身の意味づけ・位置づけの獲得〉、〈将来的なビジョンの確認〉、〈自身やチームの成長への気づき〉、〈自身の支援活動の振り返り〉が挙げられた。

次の二名の語りにおいては、外部支援者が講師となる形で実施した研修に参加した現地支

援者が、〈将来的なビジョン〉や〈自身の意味づけ〉を確認しているようすが示されている。

・研修をやってもらって、先をいっておかしいですけども、(中略)先を見通せたということが、何も先が見えないというよりは、私にとっては安心感につながって、すごくよかったです。(宮城 A、女性)

・事例検討など、そういったときに外部の方のアドバイスをいただいたり、自分のやっていることに関しての意味づけをもらえたり、そういったようなことはヒントになってきたりしたかなと思います。やはり中だと煮詰まってしまったものが、少し違う客観的な、距離感があるところからの意見で、少しわかりにくかったことがわかるようになるというか。(福島 B、男性)

また、《充足感》の要素としては、〈安らぎ・癒し〉、〈自分自身の居場所〉という要素とともに、新鮮な体験や知識の享受による充足感である〈スペシャル感〉の要素も含まれていた。

たとえば、次の語りにおいては、未経験なことへの不安・模索の中で、外部支援者の継続的な研修に参加し、〈支援における知識・スキル〉と〈自分自身の居場所〉を習得していったことが示されている。

・緊張していたのがこんなのでいいんだと。最初は暗中模索というか、何をしたらいいのかということもわからなかったのだけれども、行って見て、私たちが受け入れられるという。受け入れてもらって、すんなり聞き上手になっていたかな、と思う気持ちがあるのです。(宮城 B、女性)

さらに、《つながり・拡がり》の要素としては、〈組織内でのコミュニケーションの円滑化〉、〈スタッフの相互理解の促進〉、〈ネットワークやつながりの再構築〉、〈ネットワークの拡が

り・新たな人間関係〉の要素が挙げられた。

●ネットワークづくり・維持

外部支援者によるネットワークづくりや維持のサポートにともなう変化としては、《負担の軽減》、《学び・発見》、《つながり・拡がり》の3つのカテゴリが含まれていた。

《負担の軽減》の内容としては、〈外部支援者への信頼・安心感〉、〈苦労の共有・ストレス軽減〉、〈業務量の軽減〉が挙げられている。

また、《学び・発見》の要素としては、〈ネットワークの意味・効果への気づき〉があり、《つながり・拡がり》の要素としては、〈ネットワークの結束力の強化〉や〈交流の場・交流の広がり〉が挙げられた。

次の発言では、外部支援者のサポートのもと、構築・強化されたネットワークにより、事業所同士の〈苦労の共有〉が行われ、〈ネットワークの意味への気づき〉を得ている。

・本当にネットワークで集まるときに、計画相談の大変さやいろいろな事業所さんと分ち合えたり、「こういうふうになったらいいね」というようなお話をさせていただくことで、日頃のうっ積した思いなどを吐き出せるので、いい機会だなと思います。事情は違いますが、共通する部分があったり、私自身にとって、ストレス発散の場にもなるし、ありがたいなと思っています。(福島 A、男性)

●サロン活動・イベント・交流の場づくり

地域における、あるいは、地域住民に対するサロン活動やイベント・交流の場づくりによる変化として、《学び・発見》、《充足感》、《つながり・拡がり》、《地域への貢献》の4つのカテゴリが含まれていた。

《学び・発見》としては、〈自身の健康への

関心)、〈自身のストレングスへの気づき〉、〈自身の役割への気づき〉が挙げられた。

また、《充足感》の要素として、〈癒し・安らぎ〉、〈スペシャル感〉、〈自身の居場所・役割の獲得〉、〈活動の意味づけ・誇り〉が抽出された。

次の三名の発言は、外部支援による〈スペシャル感〉、すなわち、新鮮さや刺激を感じる要素についての語りである。

・私は、あまりこの町から出たこともないし、自分の殻に、自分の頭の中でのつながりみたいなものがあつたのですけれども、(コンサルティング担当者の先生等による) そういう都会の考え方、学識者の先生のお話から刺激を受けて、「ああ、そうか」と、自分も勉強できるという点が、私にとってはよかったですと思っています。(宮城 B、女性)

・毎回、(参加者の方は) 結構楽しみにされているのです。「今度は誰が来るの」という感じで、宮古のスタッフではなくて、よそからゲストが来るという感覚が、当事者さんにとってはすごく励みというか、楽しみにしている部分があるようです。(岩手 A、女性)

・やはり盛岡の人たちが来て活動するというのは、特別な人が、今、ここに来るから、私たちはそこに行きたいということなのです。(岩手 A、男性)

サロン活動等による《つながり・拡がり》としては、特に地域内での〈つながりの再構築〉、〈ネットワークの広がり・連携の強化〉、〈新たな人間関係の拡がり〉の要素が挙げられた。

また、《地域への貢献》としては、〈支援の薄い部分への働きかけ〉、〈地域の要支援者のリカバリー〉、〈地域における活動の意味づけの獲得〉、〈地域ニーズの確認・掘り起し〉という要素が抽出された。

●先進地域への視察・研修

先進地域への視察や研修による変化としては、《学び・発見》と《苦労の軽減》の2カテゴリが挙げられた。

《学び・発見》の要素としては、〈支援場面での実践・活用〉、〈チームとしての方向性の気づき〉が含まれる。また、《負担の軽減》の要素としては、〈苦労の共有〉が含まれていた。

次の発言では、先進地 (ACT チーム等) の視察を経験した現地支援者により、視察を通して習得した知識の〈支援場面での実践・活用〉に関して語られている。

・ACT 研修など、そういうところで、実践的なものを見せてもらったり、言葉で聞いたりということと、自分の今やっていることの関わりをすり合わせたりというのもやってきて。(中略) 時々思い出して、「ああ、これの意味はこういうふうなことでやってたのではないかな」なんて思い出したりもするので、実践に活かせるようにはなったのではないかとっています。(福島 B、女性)

●学会・研修会・交流会への派遣

学会や研修会、当研究班として主催した交流会等への参加 (外部支援者からの派遣) による変化としては、《つながり・拡がり》、《学び・発見》、《充足感》の3カテゴリが挙げられた。

外部の研修会による《つながり・拡がり》の要素としては、より広い意味での〈ネットワーク・人脈の拡がり〉とともに、〈新たな経験〉が含まれていた。

また、《学び・発見》の要素としては、〈支援における知識・スキルの習得〉が挙げられ、《充足感》としては、〈楽しさ〉や〈刺激・新鮮さ〉が挙げられていた。

次に挙げる二名の発言は、ともに、学会等の地域外の研修への参加を経験した現地支援者

の声である。前者は、〈支援における知識・スキルの習得〉や〈楽しさ〉を、後者は、〈刺激・新鮮さ〉を語っている。

・学会などに行く機会がすごく多くて、私も医療のことをやってきたわけではないので、全然精神科のことも知らなかったし、単純に精神科や精神科の病気のことを、いろいろな機会ですいろいろな人から聞けるのはすごくよかったです、楽しかったなと思います。(福島B、女性)

・あれ(学会のシンポジウム)は、すごい衝撃だったのです。本当に見てよかったと思います。職種もばらばらだし、当事者も入っているという。それは、やはりなかなか見る機会はなかったです。衝撃でした。見に行った甲斐があったなと思った。見入ったというか、感動した。(岩手A、男性)

●当研究班のグループインタビュー

当研究班における定期的なグループインタビュー(ヒアリング調査)に関しても、現地支援者における変化が挙げられていた。

現地支援者の発言のなかでは、ヒアリングによる変化として、《充足感》、《学び・発見》の2つのカテゴリが抽出された。

《充足感》としては、〈安らぎ〉や〈日常業務・日常空間からの開放〉の要素が挙げられた。

また、《学び・発見》としては、〈自身の経験の振り返り・気づき〉、〈他のスタッフの体験を聞く場〉、〈ネットワークの強化〉の要素が挙げられていた。

次の三名の発言は、ともに、ヒアリングによる変化に関する現地支援者の声である。一人目は、〈安らぎ〉や〈日常業務・日常空間からの開放〉を、二人目は、〈他のスタッフの体験を聞く場〉として、三人目は、〈自身の経験の振り返り・気づき〉としての変化を語っている。

・初回の時、先生(調査員ら)が来て、一人一人と話をしてくれた空気の流れが、すごく印象に残っている。ゆっくりいられたという。来ていただいたおかげで時間をつくれて、別な空間にいるみたいなのがあったのです。私にとって、すごくそれは忘れられない時間です。(宮城A、女性)

・ヒアリングの場は、すごく、それぞれが普段言わないようなことを言っている場です。これが、中の人間でやろうとしたらまず(発言が)出ない。外の人が来てこのフォーカスグループをやってくれるということが、たぶん一つ、外の支援者に手伝ってほしいこと。すごく大事な時間です。(福島B、男性)

・ヒアリングに参加して、いろいろなお話をさせていただく中で、自分が気づいていなかったけれども、笑えていない、何をしても楽しいと感じていない、自分もいろいろな意味で支援者として傷ついていたのかなということに気づいたり。何か話さないと、と考えているうちに、自分の中でいろいろなことを考えて。あの時あんなことがあった、こんなことがあったなど。(岩手A、女性)

3) 自分自身やチーム/ネットワークへの希望(表7)

自分自身やチーム・ネットワークに対する希望は、44のサブカテゴリから6カテゴリに整理された。

以下では、「自分自身について」「地域づくり/地域との関係性について」「外部支援との関係性について」「震災の記憶・情報発信」という項目に整理して、提示している。

●自分自身について

《自分自身の成長》のカテゴリにおいて、自分のあり方について言及された今後への希望としては、〈支援技術の習得・定着化〉、〈自身が健康であること〉、〈経験を積むこと〉といっ

た自分自身の成長や健康、技術の習得を望む声とともに、支援チームや地域との位置づけの中で、〈他の専門職との連携〉〈他のスタッフとのコミュニケーションの円滑化〉、〈自身の強みの活用〉、〈自身の役割づくり・活動や地域への貢献〉を希望する声も見られた。

●支援活動／支援チームについて

《活動の存続・発展》のカテゴリにおいては、〈活動の存続・継続〉、〈活動の拡がり・新たな展開〉、〈経営面の安定〉、〈日々の積み重ねの評価〉といった、チームやネットワーク等への期待が挙げられた。

また、支援チームにおいては、〈スタッフが健康であること〉、〈スタッフ間の良好な関係性〉、〈スタッフ間のコミュニケーションの円滑化〉、〈各職種の強みの活用〉、〈開かれた組織づくり〉、〈柔軟性のある組織づくり〉、〈安心感のある職場環境〉といったチームづくりへの希望が挙げられた。〈方向性・目標の意思統一〉を模索しているチームや個人からは、活動としての方向性を今後、模索・検討していきたいという声もあった。

●地域づくり／地域との関係性について

地域づくりに関連するカテゴリは、地域の在り方についての希望と、地域と支援活動との関係性に関する希望との2つのカテゴリに分けられた。

《地域のネットワークづくり・ネットワーク強化》では、地域の在り方についての希望が語られており、部署間での連携などの〈横のつながりを大切にする〉こと、〈関係機関間でのつながり・連携の強化〉、〈助け合える関係性〉や、住民同士の「隣近所」のような関係性・コミュニティづくりが挙げられた。

また、《地域との関係性・定着》としては、〈地域ニーズを把握していくこと〉、〈地域へのアウ

トリーチ〉、〈地域への貢献〉、〈地域他機関との連携〉、が挙げられた。

加えて、〈地域での定着〉としては、「皆さんに慣れ親しんでもらえるような会にしていけたら（宮城 B、女性）」、「我々が社会資源の一つになればいいな」というところがあって（宮城 C、男性）」という声にもあるように、親しみのある組織や社会資源の一部として活動が地域定着していくことへの期待が語られていた。

さらに、〈地域や他の関係者への知識の伝達〉や、〈地域における人材育成〉、〈ピアの力の活用〉、〈地域に向けた提言の発信〉といった地域へ向けたソーシャルアクションについての声も含まれていた。

●外部支援との関係性について

《外部支援との関係性》としては、〈現在の外部支援の継続を希望〉する声が、外部支援者による直接支援が実施されていたサイトなどを中心として多く挙げられた。

また、〈外部支援との長期的な連携〉、〈外部支援の受け継ぎ展開すること〉、〈外部支援者による情報提供の必要性〉、〈他地域との交流の場・機会の継続〉についての希望も挙げられた。

「細く長くつながっていただけると、心強いかなという気持ちはあります。（宮城 A、女性）」という声にもあるように、無理のない形で、細く長く外部支援者との関係性をつないでいきたいという声もある。

次の二者の発言では、〈現在の外部支援の継続〉に関する希望や〈外部支援者による情報提供の必要性〉が語られている。

・やはり何かのきっかけというあれがないと、やっていけないよ、と。外部からの刺激というのもすごく必要だよね。私は必要だな。私にとっては必要だなと。結局、いつもマンネリ化になってくるとあれだから、ここで少しいろいろなお話を聞

いたりというのがあれば、まだ違ってくると思う。

(宮城 B、女性)

・先生たちが持っているいろいろな情報。いろいろな被災地だけでなく、こんなよかったのがあるよというような情報でもいいからもらって、そして私たちが、そういういい情報というのをもらったのを、そういうのだったら私たちもやってみましょうかという。いい情報をいただきたいなど。

(宮城 B、女性)

また、次の二名の発言では、〈現在の外部支援の継続〉に関する希望を持ちながらも、自らの地域において〈外部支援の受け継ぎ展開すること〉への希望も語られている。外部支援者としての「特別なこと」という要素を大切にしながら、〈他地域との交流の場・機会〉という文脈での展開の仕方や、新たな形での〈外部支援との長期的な連携〉を模索しているようすが示されている。

・いい取り組みなのだけれども、やはり全部（コンサルティング担当者）にやってもらっているというか。これはどうだろうか。そろそろやり方を変えていかないといけないのではないかと。これは、あまりおんぶに抱っこというか、これではいけないだろうと。（岩手 A、男性）

・盛岡のあの人たちが来るから、自分たちは、そこに行きたいという、この特別なことというのも大事にしていきたいとは思っています。いつまでも、盛岡（＝外部支援）に頼ってはいけなような気もするし、宮古でできることは、宮古でやっていきたいという思いはあるのです。（岩手 A、男性）

さらには、こうした文脈の中で、〈つながりのある外部支援者への情報発信〉を大切にしたいという声も挙げられていた。

●震災の記憶・情報発信

《震災の記憶・情報発信》としては、〈震災を忘れないこと〉、〈震災での経験を活かしていくこと〉といった自分自身の心構えとともに、〈復興の見通しの立たない地域への関心・応援〉、〈活動内容や効果的取り組みの外部発信〉、〈被災地を忘れられないようなシステムづくり〉といった、外部に向けた情報発信に関する希望や決意も含まれていた。

以下は、外部支援者とのつながりにおける〈被災地を忘れられないようなシステムづくり〉について語られた声である。

・「忘れないでいてもらう」というのを、気持ちの問題ではなくて、きちんとシステムとして残していただく方法が必要で…いろいろな問題があると思いますが、それは、10年で終わる話ではない、おそらく30年などというくらい長い。だから、毎年のように「申し送り」をしてもらう。例えば、毎年お手紙くれる、1回足を運んでもらって、そこでなんか講演やってもらうなどという、その忘れないよということが、いざというときに頼ろうと思うことになるわけです。（中略）タイミングもありますから、ちょうど疲れているときに「疲れているでしょ」と言われたって、「助けて」と言えないのです。やろうと思ったときにちょうど来てくれないと困るので、そのために僕は、身近な人たちのやるべきことと、それから遠くのほうで見てもらう。ある程度の距離を持ちながら継続的に。それは、「精神論」としてではなくて、何か残していただくという「方法」であることが大切だと思うのです。（福島 A、男性）

D. 考察

1) 各サイトの特徴と震災後の「苦労」

当研究班のコンサルティング活動の対象となった7サイトは、「チーム／ネットワーク」、「既存の組織／震災により結成された組織」、

「精神保健に特化した組織／精神保健に特化しない組織」といったさまざまな側面において、きわめて多様性に富んでいる(図 1)。それゆえ、震災後の「苦労」に関するテーマにおいても、それぞれのサイトの特殊性に応じた、多様なカテゴリが抽出された。

震災前より存在していたチームやネットワーク(宮城 A、岩手 A)では、地域における特性や強みを活用しながら、震災により、チーム／ネットワークとして抱えた苦労や、地域において生じる課題を改善していくこと、および、チームやネットワークをさらに強化し成長させていくことが課題の中心として挙げられた。こうした既存の活動体における「苦労」の文脈は、「地域としての課題」や、「個人的な支援場面における苦労」として語られていた。

一方、震災を機に、新たに立ち上げられたチーム(宮城 B・C、福島 A、岩手 A)においては、多様な価値観や専門性、出身地、年齢や性別、そして被災体験や震災に対する向き合い方をもつ個人がチームを結成し、震災後の大きな変動の中で、活動を形作っていくことが課題の一つでもあった。また、震災を機に、目標を新たに設定されたネットワーク(福島 A)においては、同じ県内でもさまざまな被害状況が生じている中、そして、時間の経過とともに、地域間での復興格差がさらに広がっていく状況の中で、どのように組織員間の活動における意思統一を図り、ネットワークを強化し拡大していくか、ということが課題の一つでもあった。これらの震災を機に、新しく立ち上げられた組織においては、チームや個人として、多面的かつ多様な苦労が語られていた。

また、本研究班における対象地域は、精神保健医療福祉に関する課題を活動目的の中心としたサイト(宮城 C、福島 A・B、岩手 A)と、より広い意味での地域におけるメンタルヘルスをサポートすることを目的としたサイト(宮城 A・B、岩手 B)という側面からも二分され

る。本研究における調査結果では、前者においては、〈活動の目標・方向性の模索〉、〈チームとしての立ち位置の模索〉などの苦労として、後者では、〈支援にかんする知識・技術の不足〉、〈未経験な現場での不安〉などの苦労として語られていた。

精神保健医療福祉を中心的な課題として活動するサイトにおいては、未曾有の大震災後の「未経験」の現場の中、支援者にとってもストレスfulな状況のもとで支援活動が展開された。もともと社会資源が十分ではないうえに、震災による被害や放射能の問題等を背景に、社会資源が大きく制限される状況の中、複雑困難なケースへの対応が求められたサイトもある。また、時間の経過と共に、地域がさまざまに移り変わっていく中で、活動の位置づけをどの場所にどう位置付けるかという苦労や模索の経験についても、各サイトより語られていた。

加えて、従来の精神科医療の現場における支援よりも、さらに多様性に富んだ個性や価値観のある個人が結集する組織を、誰が、どのように運営していくかということも、チーム／ネットワークとしての苦労の一つとして挙げられていた。実際にスタッフ同士の衝突や葛藤が表面化したチームも複数見られており、こうしたチームにおいては、その中で、スタッフ間の葛藤をどう乗り越え、どのように方向性を一つにしていくかということが大きな課題の一つでもあった。

一方、復興支援や地域づくりなど、幅広い課題を扱う活動として立ち上がった組織では、これまでに支援経験のない者や、精神保健の分野での支援経験のない者も多くを占め、自分自身についての力や位置づけが不明確な状況の中で、支援を模索していくという苦労が語られた。全くの「未経験」の現場の中で、自分自身はどのような役割を担うことができるのか、チームとして、活動として、どのように地域に入りこみ、支援を展開していくことができるのか、ということが個人・チームとしての課題として挙

げられていた。

なお、本研究における調査の中で、各サイトの現地支援者が、個人や組織としての苦労を語る話の中で、「模索」という表現が多く使用されていた。そして、ある現地支援者は、中長期的な支援活動の中で蓄積された、簡単には解消することのできないストレスを「重たい疲れ」という言葉でも表現していた。

震災直後における被災地の支援活動は、ある意味、地域や住民におけるニーズも明確であり、支援活動を行う上での達成感ややりがいは明確であったものと推察する。苦労や目標が明確であればこそ、チームやネットワークとしての結束力は強化されていくはずである。

しかし、被災地における中長期的な支援活動の中では、徐々に目に見える形での被害が修復され、地域としてのニーズが見えづらいう状況にもなりつつある中、個人やチーム／ネットワークとして、活動の意義や役割、方向性をどこに見出していくのかを「模索」することとなる。中長期支援という混沌とした状況であるがゆえの「重たい疲れ」であり、現地支援者の抱える精神的な負担の根深さでもあると推察する。

しかし、模索の状況は、「苦労」の側面をもつと同時に、「成長」の一過程でもある。模索の過程の中で、当事者である現地支援者自身が、どのように道筋を見つけていくか、それを外部支援者がどうサポートしていくのか、といった内容が、外部支援者との関わりにおける「成長」の文脈にもつながっていた。

2) 外部支援者による「支援者支援」

前述のような、各サイトにおけるさまざまな苦労の状況のもと、当研究班における外部支援は、各サイトのコンサルティング担当者が中心となりながら、対象チーム／ネットワークに対し、さまざまな支援が展開されてきた（図 8）。

当研究班では、対象チーム／ネットワークの

現地支援者に対する定期的・継続的なスーパーバイズやコンサルテーションを中心としながら、研修活動、先進地への見学や研修などへの現地支援者の派遣から、地域におけるサロン活動の展開、要支援者に対する直接支援まで、各サイトの課題やニーズに基づき、現地支援者の支援活動を補い強化する形で実施されている

（表 5）。当研究において、各サイトのコンサルティング担当者より提供された支援者支援の多様さ・多彩さは、本稿の最後の掲載した**参考資料 1～7**（各サイトでの活動を継時的にとりまとめた資料）において、詳しく示されている。

こうしたコンサルティング担当者による支援者支援の活動に加え、研究班の本体としても、研究員等が中心となり、当ヒアリング調査をはじめとして、交流会や自主シンポジウムの開催等、コンサルティング活動を補い強化する形、あるいは、サイト同士のつながりづくりなどの役割として、外部支援を継続してきた。

当研究班における支援者支援は、コンサルティング担当者と研究班本体との「重層的」な構造によるサポート体制のもと、継続的な展開が行われてきたことに大きな特徴がある。

本研究の分析結果において、外部支援により生まれたものとしては、《負担の軽減》、《地域への貢献》、《学び・発見》、《充足感》、《つながり・拡がり》の5つのカテゴリが挙げられた（表 6）。

このうち、《学び・発見》のカテゴリは、どのような形態による外部支援の文脈においても含まれる要素であった。このカテゴリに含まれることとは、「支援技術・知識の獲得」等の新たなものを獲得することを意味するばかりではなく、支援者自身や組織として、今ある状況や、今ある自分自身に、新たな「意味づけ」や「位置づけ」を見い出したり、「気づき」を得るといった経験も含まれている。

また、《負担の軽減》や《地域への貢献》、《充足感》といったカテゴリの中にも、決して一過

性による効果としてではなく、現地支援者が今後も引き継ぎ、高めていくための力ともなりうる要素も多数含まれている。《つながり・拡がり》のカテゴリでは、今後の個人として、組織としての可能性を広げる要素が含まれていた。

外部支援者による役割としては、苦労や負担を軽減するといった補完的・応急処置的な役割のみならず、支援の「当事者」である個人やチーム／ネットワークが成長し、地域がリカバリーしていく過程をサポートするものでもあることが示唆される。

これらの調査結果をふまえ、外部支援者の意義・位置づけを整理すると、外部支援者の大きな特徴の一つとして、現地支援者との「距離感」をもつ存在であることが挙げられる。

支援者支援においては、外部支援者としての「距離感」の在り方が重要であり、現地のニーズとうまく合致せずに展開される状況は、本稿の「苦労」の文脈において語られるような、現地支援者にとっての「気疲れ」の一つともなりうるだろう。しかし、継続的な支援者支援の中で、外部支援者との関係性が構築され、「第三者的」な立場で状況を客観視できるという外部の者としての強みが発揮されていく中で、現地支援者にとって、距離感があるがゆえの「安心感」を提供する存在となる。

コンサルティング担当者の存在について、特に震災を機に立ち上げられた組織の支援者から、「少し外に頼れるという所がすごく気持ち的には楽になった」、「(チーム内部では)煮詰まってしまったものが、少し違う客観的な距離感があるところからの意見で、少しわかりにくかったことがわかるようになる」といった声が挙げられていた。また、外部支援者が入る形でのヒアリングの場に関しては、普段とは「別の空間にいるみたい」で「ゆっくりいられた」、あるいは、「自分が気づいていなかった」ことに向き合ったり、「自分の中でいろいろなことを考える」時間になった、との声もあった。

特に、震災を機に立ち上げられた組織においては、中長期的な支援により、活動としての方向性が見えづらくなる中で、組織内におけるさまざまな葛藤や衝突が生じることもある。また、組織の課題として表面化されずとも、個人の中で、そのような葛藤状況を蓄積させていくことも多い。こうした、組織内で共有しづらい葛藤状況等の課題に対しては、組織外の「外部支援者」という立場が、一つの重要な「はけ口」にもなり、精神的な面での負担を軽減し、現地支援者が次に進むステップを考えるうえでの有用な存在ともなりうる。特に、当研究班で実施されたように、現地支援者にとって、自身の経験や実践とつながるような、より実践的な経験・知識をもつコンサルティング担当者による継続的支援は、苦悩の状況に「意味づけ」を与え、課題を整理し、力を発見するものと示唆される。そして、自分自身や活動体としての、目標や方向性を導き出す上での、一つのモデルや手がかりともなりうる。「第三者」「適度な距離感」という要素に加え、外部支援者に対する確かな信頼感が、現地支援者にとっての大きな「安心感」につながるものと推察する。

加えて、外部支援者のもう一つの特徴として、外部の支援者だからこそ、「特別感」がある。

特別な存在であるからこそ、受け入れられづらい側面や、逆に、外部支援が定着することによって、今後それを地域の中で引き継いでいくことの難しさといった課題も含まれる。しかし、当研究班における外部支援者の存在は、中長期的な支援に移行するほどに、現地支援者にとって、成長の過程におけるプラスの刺激となってきたことが確認された。

外部支援のもつ「特別感」は、現地支援者の発言の中では、「外部からの刺激」、「新たな風」、「特別な人」、「特別なこと」、「ゲストが来るという感覚」などといった言葉で表現されていた。

「特別な人が、今、ここに来るから、私たちは、そこに行きたいということ」「何かのきつ